

令和4年度 岩手県立大学 アセスメント・ポリシーに基づく評価結果

岩手県立大学教育支援本部

【全体総括】

令和4年度の教育課程に対し実施したアセスメント・ポリシーに基づくアセスメント（以下「令和4年度アセスメント」）では、おおむねすべての学部・研究科において、ディプロマ・ポリシー（以下「DP」）に掲げる目標を達成しているという調査結果であった。一方で、本アセスメントの実施により、より重点的に学生の能力を向上させるべき事項や、一部アセスメント・評価方法の妥当性に係る課題等が発見された。

今後、令和4年度アセスメントの結果を踏まえた各学部等におけるカリキュラム及びそのアセスメント方法の見直しを行うとともに、その後においても、アセスメントと改善のサイクルを継続して行っていく必要がある。

なお、ここにおいて公開されているアセスメント結果は、アセスメントのプロセスの総括であり、この総括に至るまでの詳細なデータ等は割愛されている（学内において共有）。

1. 大学学部アセスメント

【看護学部】

《結果総括》

看護学部は、DP1のアセスメントに関して、外部試験（思考力テスト）と最終的な包括評価が行える卒業研究ルーブリックを用いている。また、DP2からDP6に関しては、看護系大学協議会が作成した「看護学士課程教育のための卒業時到達目標（以下、「到達目標」）」を用いて主観的な到達度の確認、また、実習においては「臨地実習における看護技術確認表（以下、「看護技術確認表」）」（4年間の各実習を通じて実践を記録）を用いて、その経験の内容、および主観的評価（「一人のできる」から「見学のみ」「未経験」）から確認した。

結果、4年間を通しての特に汎用的な能力を示すDP1（学びの主体者となり、クリティカルに思考し、論理的に表現できる）については、思考力テストよりその高まりが確認されている。また、学年が上がるごとに学修時間は増え、主体的な学びに発展させられているといえる。

DP2、DP3については、「到達目標」において高く評価しており、学びへの自信が確認できた。DP4の実習での看護技術体験については、学生自身が経験するには高い医療技術も含まれているため、その項目においては今後学内演習、シミュレーション等で強化する必要がある。

DP4には「多様な場で状況に応じた看護の方法を考えることができる」を目指しているが、「到達目標」においては、保健、医療、福祉にまたがる場すべてにおいての実践にはまだ十分な自信が確認できなかった。また、DP5（基本的な看護技術を用いて、対象となる人へ支援することができる）は、コロナ禍の影響もあり、令和4年度卒業生は臨床において十分な経験ができていないことも「看護技術確認表」から見受けられた。

しかし、看護学部の学修の総括ともいえるDP6（看護学を探究し発展させる基盤を備えている）は、卒業研究で8割が「優」「秀」評価となり、学びの深まりを確認した。また、本DPに関連する「到達目標」では、専門職として研鑽し続ける基本能力への自信を確認した。

総括として、課題点はあるものの、学びを発展させる基盤を備えることができたという評価ができる。

《次年度以降の課題》

- 各アセスメント項目で、物事を批判的に考える能力、社会の動向を踏まえて看護を創造する力、地域の特性と健康課題を査定、把握し、地域ケアを創造する力など、強化が必要で

ある。

【社会福祉学部】

《結果総括》

社会福祉学部のアセスメントは、DP とカリキュラム・ポリシー（以下「CP」）に基づき各 DP に掲げられた能力を育成する関連科目の GPA の得点傾向で行った。また、DP にかかわる重要科目でのアセスメント方法として「社会福祉基礎演習ルーブリック」「卒業課題研究ルーブリック」を用いてのアセスメントを行った。

その結果、DP3（自らの考えを的確に表現する技能を身につけ、他者と論理的に議論することができる）、DP5（社会福祉学科では、個人に対する直接的援助、個人を取り巻くコミュニティ、それらの背景にある制度・政策の3つのアプローチを統合して、福祉的課題の発見と解決に取り組むことができる）および DP6（人間福祉学科では、発達科学や心理学、人間工学から対人援助のアプローチを活かして、福祉的課題の発見と解決に応用的に取り組むことができる）について、おおむね学習成果が表れていると評価することができ、一方、DP1（幅広い教養を基盤に、社会福祉学への理解を深めることができる）、DP2（自らの考えを的確に表現する技能を身につけ、他者と論理的に議論することができる）及び DP4（学修した知識と実社会の事象を有機的に関連づけることができる）については課題があるが、特に DP4 については平均 GPA と比べ著しく低かったことから、学習成果の向上に向け努力する必要があると考える。

《次年度以降の課題》

- DP4 については、「学修した知識と実社会の事象を有機的な関連づける」を意識した授業内容を増やしていきたい。
- また、DP2 に関しては、ルーブリック評価の結果を参考に、「他者の報告への関与・理解」、「テーマに対する分析や考察」、「レポートの完成度（文章構成や表現力など）」の改善を図る。

【ソフトウェア情報学部】

《結果総括》

ソフトウェア情報学部は、各 DP に関連する主観的評価としての各種自己評価（「プロジェクト演習自己評価」「授業評価アンケート」「卒業研究・制作」）を用いて、DP にかかわる学生の学びの実感、評価の結果を用い、加えて、客観的評価として、各 DP の育成に関連する科目の成績統計によって、アセスメントを行った。

結果、DP1 から DP6 の各項目において、着実に学修成果が表れていると評価できた。またプロジェクト演習等の自己評価の各項目においても向上が見られ、学生自身の視点でも成果が表れていると評価できる。しかし一方で、一部の4年生が卒業要件を満たさず留年している。また、コース外科目の履修率の向上に向け努力する必要があると考える。

《次年度以降の課題》

一部の4年生が卒業要件を満たしていない点については、アセスメント方法の妥当性について多角的に確認する必要がある（例：GPA が高いにもかかわらず卒業要件を満たさない場合に原因を調査するなど）。次年度以降、アセスメント方法、特に DP 項目と授業科目の関係について見直しを行う。

【総合政策学部】

《結果総括》

今回のアセスメントは、学年別を実施した。まず、データが比較的早く揃った4年次生のデータを用いて「勉強時間」「各 DP・科目群で身についたことの自己評価」「各科目群の成績」の相互関係を分析し、アセスメント・ポリシーの【アセスメントの方法と活用の詳細】に記載されている6つの項目のうち、「3. 専門教育における学習成果を確認するアセスメント」「4. 実習科目における調査・分析科目の学習成果を確認するアセスメント」「6. 大学教育の総決算として、幅広い DP を最終的に評価するアセスメント」に相当する分析を行った。

4年次生の分析結果については、2023年6月7日に実施された学部 FD において議論を行った。その際、全 DP・科目群の学生の自己評価については、学生による評価基準に違いがあることや、科目群によって事前学習の必要性が異なることなどを踏まえ、分析データとしての使用は慎重を要するとの認識が共有された。

上記の議論を踏まえ、その後に実施された1年次～3年次のアセスメントにおいては、比較的客観性がある「勉強時間」と「成績」の相互関係を重点的に分析する方針とした。すなわち、「DP の能力を身に付ける基礎としての勉強時間（勉強習慣）」を主要テーマとし、アセスメント・ポリシーの【アセスメントの方法と活用の詳細】に記載されている6つの項目のうち、「3. 専門教育における学習成果を確認するアセスメント」「4. 実習科目における調査・分析科目の学習成果を確認するアセスメント」に相当する分析を行った。分析結果については2023年9月6日の学部 FD において議論を行った。その際、今回の分析を、教育の質保証の観点から捉える必要性が共有された。

《次年度以降の課題》

今回のアセスメントでは、DP・CP・カリキュラムの改定の必要性を示唆する結果は得られなかった。ただし、この結果だけから DP・CP・カリキュラムの改定の必要性を判断することは困難である。今後、今回とは別な観点からの分析を積み重ねていきながら、DP・CP・カリキュラムの改定の必要性を絶えず点検していく必要がある。

なお、今回の分析結果については、科目内容の見直しや、科目間での内容面での連携に関する教員間での議論の素材として活用できる可能性がある。今後、このような DP・CP・カリキュラムの改定を伴わない形によって教育の質の向上を図るための学部内議論の素材としての利用も視野に入れながら、本分析結果を活用していく方針である。

【高等教育推進センター：基盤教育】

《結果総括》

基盤教育については、各種データを用いて学修実態と学修成果の2側面から評価を行った。

1) 学修実態

特に1・3年生では、興味関心の高さや専門科目に役立つという理由で履修選択を行っていた。基盤教育の履修者数は学年・学部によって異なるが、特に高年次になると減少傾向にある。履修取り消しは、通常登録よりも抽選科目のほうがやや多かった。

出席率については総じて高く、真剣な態度で参加する学生が多い。授業の難易度は概ね適切だが、高年次で比較的容易に感じられる。基礎科目と教養科目の熱心度は高いが、年次が進むにつれて相対的に低下している。

2) 学修成果

科目ごとの成績評価では、大部分の学生が学修目標に到達しているが、一部の科目や学生で低い成果が見られる。思考力の評価では、協働的思考力が向上している一方で、批判的・創造的思考力は変化が大きくはない。英語力は、1年生では向上し、2年生では停滞する傾

向にある。

副専攻について、地域副専攻では、特定の年次の学生が高い能力を示しているが、1年生では全体としては低くとどまっている。国際副専攻では、一部の能力指標で高い評価を得ているが、高年次の評価はこれからである。

《次年度以降の課題》

1) 学修実態

高年次学生の基盤教育履修の促進や、学修目標・授業方法の改善を促す工夫が必要である。

2) 学修成果

評価のあり方についても共通理解が必要である。成績評価と同時に、思考力や英語力、副専攻での能力の成果についても、要因の分析を行う。

2. 短期大学部アセスメント

【盛岡短期大学部生活学科生活デザイン専攻教育課程】

《結果総括》

DP1については、PROGテストにより、1年次4月および2年次9月のリテラシー・コンピテンシーを測定し、成長分析を行った。1年次、2年次の結果には大きな違いはないものの、リテラシー、コンピテンシー共にやや高レベル側に推移した。また、教養科目を含む全科目の2年次通算 GPA において、設定する達成基準を満たす者の割合についても点検した。全体的に成績は良好であった。

DP2及びDP3はそれぞれ専攻別の専門知識にかかわるDPである。DP2は卒業時の成績評価より、専門科目のみを集計した2年次通算 GPA において設定する達成基準を満たす者の割合を点検した。全体的に成績は良好であった。

DP3は「二級建築士学科模擬試験」によって受験に必要な知識の習得度を測定した。アセスメント対象となる二級建築士受験資格取得者は12人であり、卒業時の知識の習得度合いを認識させた。

課程の総括的な能力であるDP4は、「卒業研究」を通じ、卒業研究梗概集の作成や発表会評価により、問題解決能力や実践力の修得度を測定した。「卒業研究」の成績評価において、設定した達成基準を満たす者の割合を点検し、所定の能力を修得していることが確認できた。修得度は良好であった。

《次年度以降の課題》

- 直近のカリキュラム改定は令和5年度入学生から行っており、今後数年の達成度の変化についても注意深く観察し、さらなる改善に生かしていく。
- DP1の「幅広い教養」、DP4の「課題発見・解決能力」については、より効果的な評価方法についても検討を続ける必要がある。

【盛岡短期大学部生活学科食物栄養学専攻教育課程】

《結果総括》

DP1、DP4のコアとなる能力は判断力である。本専攻は食に関する科学的な知識と技能を身につけ、食生活をよりよい方向へ支援する実践能力を兼ね備えた専門職（栄養士）として社会に貢献できる人材の育成を目指している。アセスメントには「PROGテスト」を実施し、『知識を活用して問題を解決するリテラシー』と『人と自分にベストな状態をもたらそうとするコン

ピテンシー』を数値化し、自己の能力を客観的に把握できるようにした。令和4年度2年生の9月においても「PROGテスト」を実施し、入学時の結果と比較し、活用するように促した。2年生の方が1年生よりリテラシーとコンピテンシー共に総合の評価が高い傾向にあった。

DP2、3は栄養士に求められる資質や能力の形成を目指している。アセスメントは期末試験の成績から専門的な知識の理解及び技能の習得を確認し、履修指導を重ねるとともに、教育内容の点検を行った。令和4年度1年生の前・後期通算のGPAは大部分が「良」評価に該当する値以上、2年生の2年間のGPAは全員が「良」評価に該当する値以上であった。

2年次の12月には学習の集大成として「栄養士実力認定試験」を実施し、専門職としての資質や能力を確認した。15科目の平均点については、本学は全国より上回った。各受験者の成績評価については、大部分がAであった（受験者は新型コロナウイルス関連での欠席者を除く卒業見込みの2年生）。

《次年度以降の課題》

- 「PROGテスト」や「栄養士実力認定試験」といった既成物での評価だけでなく、「卒業研究」や「栄養士取得のため給食管理実習（学外）」等、専攻の人材育成や能力要素に見合った独自の評価を取り入れられるか検討を行いたい。

【盛岡短期大学部国際文化学科教育課程】

《結果総括》

DP1については、PROGテスト、卒業研究においてアセスメントを行った。結果、大学での学修に必要な基礎力を着実に身につけさせるとともに各科目が相互に、学生の主体的行動を促すよう比較的良好なかたちで連動しているといえる。DP2に関しては西洋・アジア・日本の文化や社会、交流の歴史について基礎から研究法、演習に至るカリキュラム構成の中で効果的に学習できるよう配慮されており、三地域における学修は適切に行われているといえる。DP3に関しては、学生の自主的なインターンシップ参加に加え、地域でのフィールドワークなども取り入れることにより、学生の主体的な社会参加を促し、地域振興に対する関心を高めていると判断できる。DP4に関してはTOEICテストなどの英語客観的評価に資するツールの受験を学生に奨励し、実践的能力を培うことで、コミュニケーション能力の向上に努めていると評価できる。以上よりDP1からDP4について概ね十分な学修成果が認められると判断できる。

一方、DP1に関しては、教養科目の内容に関する質的充実を求める声が学生・教員双方から上がっている。DP3に関しては東北地方に限定した地域学習と、国際的視野を持った地域学習との間にいかに有機的連関を持たせるかが課題である。また、DP4について、第二外国語科目における確かな基礎力と実践的コミュニケーション能力の涵養を目指すためには、現行の科目設定において課題が残る。

《次年度以降の課題》

- DP1の基盤教養科目の内容の質的充実に関しては、令和6年度からのカリキュラム改訂により、抜本的改善を図る予定である。
- DP3の地域学習と、国際的視野を持った地域学習との間の連関については、令和6年度からのカリキュラム改訂により、適宜改善を図る予定である。
- DP4の第二外国語授業内容の充実に関しては、令和6年度からのカリキュラム改訂で新たに発展的科目の設定を行うなどして、より質の高い語学授業を展開する予定である。

【宮古短期大学部】

《結果総括》

宮古短期大学部のアセスメントでは、各 DP に対して、外部試験である PROG テストと TOEIC Bridge、成績評価として関連科目の GPA の得点傾向、特別研究を基に行っている。アセスメント結果として DP 1 に関しては、PROG テストの課題発見力、構想力、言語処理能力、非言語処理能力、TOEIC Bridge による語学力、基盤教育科目の GPA 得点傾向からおおむね学習効果が表れていると評価できる。DP 2 に関しては、PROG テストの親和力、統率力、基盤教育科目及びゼミ科目の GPA 得点の傾向から、着実に学習効果が上がっていると評価できる。DP 3 に関しては、PROG テストの協働力、行動持続力、専門教育科目及びキャリア科目の GPA 得点の傾向から、一定の学修効果があったと評価できる。DP 4 に関しては、専門教育科目及び特別研究の GPA 得点傾向から一定の学修効果があったと評価できる。DP 5 に関しては、PROG テストの課題発見能力及び特別研究の GPA 得点傾向から、着実に学習効果が上がっていると評価できる。一方、GPA による得点傾向では、学年進行に伴う難易度の向上が与える影響を分析する必要がある。

《次年度以降の課題》

- PROG テストに関連して、課題発見力、言語処理能力、非言語処理能力の部分に対して学修の理解が一層進むよう、更なる工夫が必要である。
- 関連科目の GPA 得点に関して、学年進行による難易度の向上も考慮しながら、更なる分析と工夫が必要である。
- 全体的に学習効果が表れるよう学部 FD 等で情報共有を行い、より一層の授業改善を呼びかける。

3. 研究科アセスメント

令和 4 年度アセスメントでは、研究科博士前期課程及び博士後期課程においてもアセスメントを実施したが、特に博士後期課程においては、学生数が少なく、アセスメント結果が数名の学生の学修成果を表すこととなること、また、当該年度に学位授与者がいない場合がある等し、総合的なアセスメントができないことを踏まえ、博士後期課程のアセスメント結果については、本報告には示さないこととする。

【看護学研究科：博士前期課程】

《結果総括》

DP1（看護学の理論に基づき、看護実践を分析し、記述することができる。）、DP2（独創性や発展可能性のある学術的に有用な看護学研究を行うことができる。）について、1 年、2 年の履修科目を通して、理論的枠組みを活用し、看護現象を捉え自身の研究テーマを明確化できた。そこから臨床の課題を独創的、また発展可能性のある研究課題から研究計画を作成し、学位論文を作成し、学位が授与された。

DP3（看護専門職としての看護実践能力・教育力・研究力・管理能力を養うことができる）は、学生のすべてが社会人学生であり、修了後それぞれの分野において、高度実践看護師（専門看護師）、また看護学教員、管理者として活躍しており、学修の成果が発揮できている。

《次年度以降の課題》

- 令和 4 年度には、博士前期課程の退学者がおり、職場と大学院での学修の両立の困難が原因であった。そのため、受験相談の段階で、大学院での学びや学修プランを具体的にイメージし、職場との調整等を十分に行った上で、大学院での学修を開始できるように支援す

ることが必要である。

【社会福祉研究科：博士前期課程】

《結果総括》

社会福祉研究科前期課程のアセスメントについては、カリキュラムマップに配置された各 DP に関連する科目 GPA、また学位論文の評価規準において行っている。また、GPA の数値のみではなく、科目特性、難易度などを考慮しアセスメントを行っている。

(1) 総合福祉コース

- DP1～DP 6 の各項目について、概ね学修成果が表れていると評価できる。
- 2 年次「課題研究科目群」の平均 GPA が他の科目群より 0.2～0.6 ポイント低い結果となっている。当該科目群は、DP1・2・3・5 に該当する科目群のため、院生に対して、質疑の時間を設ける、定期的なフィードバックを図る等により、授業内容の理解度を高めることも考えられる。
- 一方、DP 6 においては、特に研究指導Ⅱ（学位論文）の平均得点率（65.6%）が両コース全体の平均（71.2%）ならびに臨床心理コース平均（76.7%）より、それぞれ 5.6 ポイント、11.1 ポイント低くなっている。そのため、評価基準に基づく学位論文の内容を充実させるための研究指導方法を改めて検討していく必要がある。

(2) 臨床心理コース

- DP1～6 の各項目について、学修成果が表れていると評価できる。
- 2 年次「実習科目群」の平均 GPA が他の科目群より 0.1 ポイント低い結果となっている。当該科目群は心理における実習のため、学内の学習の他に学外での学びが評価されている。院生に対して、学内での実習に関する振り返り、実習先での振り返りなどの意義を伝えていくことや、事前学習・事後学習の意義を伝えることなど実習体験の理解や言語化を高めることで改善が見込まれると考える。
- DP6 においては、研究指導Ⅱ（学位論文）の平均得点率（76.7%）であり、概ね成果があったと評価できるが、さらに精度の高い研究を行い、評価基準に基づく学位論文の内容が充実させるよう、今までの研究指導方法を踏襲しつつ、可能な部分で改善点を検討していく必要がある。

《次年度以降の課題》

- 総合福祉コースでは、2 年次「課題研究科目群」の平均 GPA が他の科目群より 0.2～0.6 ポイント低い結果となっている。そのため、院生に対して、授業内容の理解度を高めるために、質疑の時間を設けることおよび定期的なフィードバックを図る。
- 総合福祉コースでは、研究指導Ⅱ（学位論文）について、評価基準に基づく学位論文の内容を充実させるための研究指導方法を改めて検討していく必要がある。

【ソフトウェア情報学研究科：博士前期課程】

《結果総括》

アセスメントは、学位論文（予備）審査報告書、修士学位論文、また DP に関連する科目群の成績統計によって行っている。

- DP1～5 の各項目について、概ね学修成果が表れていると評価できる。
- 特に DP1～4 については、学位論文審査及び修了試験結果報告書にて複数の審査教員から

(審査学生毎に)満たしていることを確認されている。

- DP5については、ほぼ準じた内容について学位論文(予備)審査報告書にて能力の確認が複数の審査教員からなされている。
- 今回のアセスメントが初年度であること、また当該年度に大規模なカリキュラム改定を実施しており、それ以前のデータと直接比較することが難しいことが問題点として挙げられる。
- 本研究科では、公開ゼミナール、論文予備審査、学位論文審査及び修了試験の3回の試験で個々の学生に対して複数の教員からチェックが入るなど、制度的にも学修環境の維持がなされていると考えられる。

《次年度以降の課題》

- カリキュラム改定の結果、年度間での比較が難しかった。来年度以降は、年度間の比較を行い、状態の変化を見つけ出せるようなアセスメントとしていきたい。修士論文審査及び修了試験結果報告書では、DP1~4の項目について、個々の学生の状況を判定する様式となっているが、同様な項目を公開ゼミナール報告書や学位論文(予備)審査報告書に取り入れることで、定期的に確認できるような体制としていきたい。なお、これに関しては、確認すべきポイントの詳細化など学生の成長度合いに応じた確認項目とすべきであり、項目についての検討をすすめたい。
- 成績が不可になる数が前年度と比較して増えているように見受けられる。これが単年度の突発的現象なのか、継続的に起きる現象なのかを継続的に観察していきたい。

【総合政策学研究科：博士前期課程】

《結果総括》

- 従来から行われていた「研究成果発表会」「修士論文構想発表会」の実施、また今年度から新たに行っている「研究指導計画書」「研究成果報告書」の作成が、本研究科で掲げるディプロマ・ポリシーの複数項目に対して効果的に働いていると考える。
- 「修士論文発表会」をはじめ上記「研究成果発表会」「修士論文構想発表会」も対外的に開かれたものとなっており大学院生はもとより研究科指導体制としても多角的・総合的な評価・指導体制の構築に貢献している。また学会誌「総合政策」など専門誌への掲載・投稿なども積極的に行われていると言えよう。
- コロナ禍でもあり、各発表会など対外的に開かれた場への積極的な学外参加者への呼びかけは控えたが、今後の状況を見ながらより積極的な参加の呼びかけを行うことも検討されよう。

《次年度以降の課題》

- 現在、DP2において「...研究テーマを柔軟に変えることができる」を掲げているが、「テーマを柔軟に変えること」を学術的研究に取り組むうえでどのように判断するか議論があった。テーマ変更の柔軟性が必要な場合も多いが、一方で、ある程度定まった研究テーマとして当初から掲げるべきとの認識もある。ここには当研究科が、既にある程度の研究経験をもつ社会人大学院生を多く含むこと、同時に学部から進級した未だ経験も少ないと思われる若い大学院生もいることなど、大学院生の属性の多様性にも影響されると思われる。これについては、アセスメント・ポリシーの運用が始まったばかりであり、様子を見ながら今後検討していくことに留めておく。